

絵本

あしあと



あしあと

あしあと

電子絵本



青い空の下、都会の大通り歩道脇のコンクリートの隙間。

たんぽぽの綿帽子が、風に吹かれています。

「風に乗る準備ができたなら行くのよ。怖がらなくていいからね。」

お母さんたんぽぽは子どもたちに言いました。

子どもたちは綿毛をふわふわと膨らませ、緊張しながら風を待っています。

その時が来ました。

迎えに来た風に乗り、子どもたちはふわわりと空に向かって飛び立ちます。

「ひろひろへ行くのよ。」

お母さんは二番目に出発する子に「さんぽぽ」と名前を付けました。

「行ってきます。」

ふわりふわり

「ぼくはどっへ行くのかな。」

ふわりふわり

次第に兄弟たちと離れ離れになりました。

ふわりふわり

「広いとっろってなんだろう。」

ふわりふわり

「あっ。風さん、あれはなに？」

地面に点々と続く模様のようなものがありました。

「あしあとね。パンダのあしあとだよ。」

たどっていくと確かにパンダさんがいました。

ほっぺたをピンク色に染め、はーっと大きなため息をついています。手になにかを持ち、それを眺めてはまたため息。その繰り返し。

「風さん、あれはなに？」

「携帯電話だよ。」

風は答えました。

「そうじゃなくて…。」

「携帯電話を拭いているのさ。」

パンダさんは布のようなもので優しく携帯電話の画面をなでています。

「そうじゃなくて、パンダさんはどうしてあんなにため息をつくの？」

風はひゅーと一息ついて答えました。

「きっと恋でもしているのじゃないかな。」

「イ？」

「誰かを深く想うこと、かな。」

「さあ、行こうか。」

風が言うつと同時に、さんぽぽは

空高く舞い上がりました。

しばらくして、地面に点々と続く模様のようなものをまた見つけました。

「風さん、あれはなに？」

「虎のあしあとだよ。」



よーいドンー！

スタートの合図とともに、虎の子どもたちは、いっせいに駆け始めました。どの子どもみんな一生懸命。

「風さん、あの子たちはなにをしているの？」

「かけっこ。」

かけっこ？

グラウンドは大賑わい。

「大人の虎さんはなにをしているの？」

ゴール近くで、大勢の大人の虎が黄色い布を振り回し、とても大きな声を出しています。

「運動会の応援。」

オウエン？

「オウエンされるとどうなるの？」

「元気になる。」

さんぽぽは、じっと虎の子どもたちを見ました。

たくましく地を蹴る足。

きらりと光る瞳。

鋭い爪とキバ。

体をおおう鮮やかな黄色と黒の縞模様。

何より、みんな楽しそうです。

「ぼくも応援したいな。」



風に乗りながらさんぽぽはこんなことを思いました。

黄色いふかふかの花のベッドで、鳥や蝶をゆっくり休ませてあげよう。
嵐のときには、大きな葉を広げて、周りの小さな花や緑を守ってあげよう。

みんなを応援したい。だから…

立派なたんぽぽになろう！

「あっー！」

また地面に点々と続く模様のようなものを見つけました。

「風さん、あれは誰のあしあと？」

「しまつまのあしあとだよ。」

あしあとは大きな建物に吸い寄せられるように集まっています。
風さんが学校だと教えてくれました。

外からは、黒板にびっしりと書かれた文字や数字を指して、
早口で説明するしまつまの先生と、

熱心にノートに書き写すしまつまの生徒が見えます。

「みんな、なにをしているの?」

「勉強だよ。」

ベンキョウ? さんぽぽは首をかしげました。

「もっと楽しく生きるために世の中を知ること、かな。」

青い布でメガネをピカピカに拭く生徒もいます。

教室の壁にはみんなの将来の夢が書いてありました。



かっこいいビルを建てたい！

びっくりするほど美味しいご飯を作りたい！

世界一はやい乗り物を開発したい！

さんぽぽは、風に乗りながららつぶやきました。

「楽しいってまぶしいんだー！」

勉強したら、たんぽぽ界で一番の物知りになれるかな。

仲間の家を建てたり、綿毛を運ぶ乗り物を発明したり、

赤や青のたんぽぽの花を咲かせる方法を考えたら面白そう！

わくわくしながらさらに遠くへ飛びつづけました。

また地面に点々と続く模様のようなものを見つけました。

「風さん、あれは誰の?」

「きりんのあしあとだよ。」

満員の観客がざわめく野外ステージにキラキラした衣裳のきりんさんが登場しました。長い首を一振りするだけで、観客は大興奮です。

リズムカルなイントロと共に、コンサートが始まりました。

きりんさんのキュートで明るい声が響きわたります。

「風さん、きりんさんはなにをしているの?」

「歌っているのわ。」

ウタ?

「どうして大勢の前で歌うの?」

「誰かを喜ばせたいからだろう。」

観客と同じようにさんぽぽの心も弾みました。

「あんなふうに誰かを喜ばせてみたいな。」

さんぽぽは随分遠くまで来ました。

あしあとを辿っているいろいろ見たことで、お母さん

のもとを飛び立ったときより沢山のことを考えるようになりました。

「みんなには、あしあとがあっただけれど、ぼくのあしあととはどこだろう？？」

さんぽぽは自分のあしあとを探しましたが、見つかりません。
風は黙っていました。



「のどがかわいたな。」

さんぽぽは地上に近づき周囲を見回しましたが、なにもありません。

先を急いでいる風をお願いして、少しだけ待ってもらいました。

日が暮れる中、必死で水を探します。

遠くから何かがゆっくりと近づいて来ました。

薄暗いせいか、さんぽぽは気づいていません。

何かは、どんどんどんどん近づいてきます。

さんぽぽがふと顔をあげると、機嫌の悪そうな顔が目の前にありまし

た。「ひゃあー」

歯をむき出しにして怒っているような顔。

さんぽぽは初めて見るコワくて大きなものにおどろくばかり。
のどはカラカラ、からだに力が入らず飛べません。

風さんは、面倒はごめんだと、どこかへ行ってしまう。

「待って、風さんー！」

風さんの姿はもう見えません。

さんぽぽは、ひとりぽっちになりました。

不安がつのります。

どうなるのかな。たべられちゃうのかな。

「ほへ、ほ…。」

綿毛が逆立つほど、さんぽぽの

震えは止まりませんでした。



とても低い声が響きます。

「ぼうず、どこから来た？」

獅子舞の中から姿を現したのは、穏やかな表情の人でした。

「ワくて大きなものは、おじさんがかぶっていた獅子舞だったのです。

「こわかった。こわかったよお。」

さんぽぽは、声を上げて泣きました。

獅子舞のおじさんは片手でさんぽぽをすくい上げ、懐から布を取り出して涙を拭きました。

気持ちが落ち着くと、さんぽぽはゆっくり話し始めました。

「ぼく、お母さんに言われて、広いところを探しているの。」

「そうしてはえらいな。広いところは見つかったのかい？」
さんぽぽにとつて、風に乗って見た世界は、どこも広く、
初めてのものばかりでした。

コイしていたパンダさん。

オウエンしていた虎さん。

ベンキョウしていたしまうまさん。

ウタっていたきりんさん。

今までのことを語りながら、これからどうしたいのか自分に問いました。

「ぼくは…。」

どうしたらいいか分からないけれど、ぼくのあしあとを残したいんだ。」

「そうか。じゃあ、協力しよう。」

おじさんはさんぽぽを手に乗せたまま、歩き出しました。

やがておじさんの家だという、長屋の扉を開け、中に入り、畳の部屋を横切って、障子をスーッと開けました。

目の前には、手入れの行き届いた庭が広がりました。

「じいぢゅっくわらうてんてんよ。お前のあしあとが見つかるまで。」獅子舞のおじさんは庭に小さな穴を掘り、さんぽぽをそっとおろしました。

ゆっくりしてもいいんだ……。

体の力が抜け、さんぽぽは、あっという間に眠りました。

おじさんがかけてくれた、温かい土に包まれて。

さんぽぽは夢を見ました。

白い雪が積もっています。

おじさんが家の中から庭を眺めていると、家の戸を叩く音が聞こえます。

ガラガラと玄関をあけると、

パンダさん、虎の子ども、しまうまの生徒、きりんさんがいました。

「外は寒いから、中にお入り。」

おじさんは、温かいお茶をふるまいながら、さんぽぽの旅の話をみんなに語って聞かせました。

みんなは、庭を見つめて、さんぽぽが目を覚ますのを待っています。

春が訪れ、ようやくさんぽぽは土の中で目を覚ましました。眠い目をこすりながら、さんぽぽは思いました。

「ぼくは夢を見ていたのかな？」

いや、きつと夢じゃない。みんなぼくのことを見守っていてくれたんだ。はやくみんなに会いたい。

その時が来ました。

土の上へ顔を出すと、おじさんがいました。

「おはよう、ちゃんぽぽ。」

さんぽぽは笑顔で挨拶を返しました。

「おはよう、おじちゃんー」

立派な芽になったさんぽぽを、おじさんが嬉しそうに見ています。

ふわりとやってきた風に、さんぽぽはお母さんへの伝言を頼みました。

『ぼくは、ぼくなりのあしあとを、見てくれるみんなの心に残せるように頑張っています。お母さんも元気だね。』
さんぽぽより



おしまい

あしあと

<http://p.booklog.jp/book/29766>

著者：さんぽぼ本舗

協力：鈴音彩子

デザイン：象形社

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29766>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/29766>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ